

ポール＝ロワイヤルの教育とラシーヌ演劇

—1671年の『キリスト教および種々の詩選集』を中心に

萩原 芳子

幼少のころに両親を亡くした劇作家ラシーヌは、親戚のついでで1637年ごろから活動を開始したポール＝ロワイヤルの「小さな学校」Les petites écolesで教育を受けたことはよく知られている。十七世紀切っぴのインテリ集団に支えられ、教師一人に最大で6名の生徒という徹底した少人数教育が行われたこの「学校」は、場所も転々とし、個人の館に分散することもあり、「学校」というより、塾か、小集団を対象とした家庭教師のよる教育の様相を呈することさえあった⁽¹⁾。ラシーヌがそこで勉強を始めた時期は定かでないが、1646年か1649年前後とされる⁽²⁾。隠士たちと親交のある他校でも勉強しているが、とくに1655年から1658年、つまり16歳からの3年間、ポール＝ロワイヤル・デ・シャンで過ごすことになる。ラシーヌはジャンセニストとイエズス会との論争、パスカルによる『プロヴァンシャル』の執筆を身近で体験したことになる。また、生徒が分散させられたこの時期に、教師のクロード・ランスロヤピエール・ニコルなどに個人指導も受けている⁽³⁾。その後、ポール＝ロワイヤルとの親交のあるアルクール校で哲学課程に1年間在籍し、1659年に学業を終了させる。「小さな学校」は1660年に、王権からついに教育活動の中止を命じられる。ラシーヌは最後のほうの生徒として、教師たちと特権的な関係を持っていたことになる。教師たちがポール＝ロワイヤルの隠士たちなどの力も借りて作成した一連の教材の多くが、生徒も疎らになったこの1660年前後に出版されているが、おそらくラシーヌはその実験台のひとりだったことが推測される。

1659年以降、ラシーヌはリュエヌ公爵に仕える従兄のニコラ・ヴィタールに頼ることになるが、早くから詩人としての道を探り始める。1659年11月のピレネ条約に際して、マザランにオードを贈っており、1660年には国王の結婚に際して書いた『セヌ川のニンフから女王へ』がシャプランやペローに認められる。そして、同年『アマジー』という戯曲⁽⁴⁾をマレー座の役者に提出するが、断られる⁽⁵⁾。ところが、ポール＝ロワイヤルの教師たちはアウグスティヌスに習って、演劇に対して厳しい態度を取っていることで知られる。教育の現場では、イエズス会のように、演劇の上演を持ち込むことはなかった。ラシーヌは、ソネを書いたことを知られてしまっただけで、おそらくポール＝ロワイヤルの女子修道院にいる叔母などから「破門に破門を宣告する手紙を毎日もらっている」⁽⁶⁾と友人への手紙に書いている。ラシーヌは、一時、1661年末から1663年の半ばまで、叔父に頼って南仏のユゼスで聖職につく可能性を探る。しかし、その計画が失敗に終わると、さっそく詩人として、劇作家としての道を歩み出すことになる。1664年6月にモリエール劇団によって上演された『ラ・テバイッド』はあまり成功していないが、1665年末に、第二作目の『アレクサンドル大王』が成功裏に開幕したのち、国王の前で上演された。その矢先に、恩師のピエール・ニコルの公開書簡で「小説を書き、劇作家である詩人は公衆を毒する者である。身体ではなく、信者の魂の毒

殺者である⁷⁾。」という一節が目に入る。ニコルの言葉は、戯曲や小説も書き、晩年は宗教的見地からポール＝ロワイヤルを攻撃したデマレ・ド・サン＝ソルランに向けられていたが、ラシーヌは自分のことと受け止めて、痛烈な書簡で応戦する。ニコルは直接の反論は周囲に任せ、1667年に数年前から暖めていたという徹底した演劇批判の『演劇論』*Traité de la Comédie* を発表する。

しかし、ポール＝ロワイヤルの教育には、厳格なキリスト教教育というイメージでは片付けられない一面がある。むしろ、ポール＝ロワイヤルが刊行した教科書、教師の書簡や覚書、生徒の回想などを読んでいくと、ヒューマンズムの理想に則った、非常に洗練された世俗的な教育が施されていたことに驚かされる⁸⁾。モンテーニュのリベラルな教育論を髣髴とさせる面も多々ある。

教材についても、哲学者のアントワヌ・アルノーの「人文学課程における教育規則に関する覚書」⁹⁾を参考にするなら、古代の歴史家による著述が多く、次いでヴェルギリウスやホラティウス、プルタルコスなどの文章が挙げられるが、テレンティウスの喜劇が含まれていたようである。悲劇についても、ラシーヌは高学年で教師のランスロにギリシャ語を習い、ソフォクレスやエウリピデスを好んで読んだという話は有名である¹⁰⁾。アルノーの「覚書」は最高学年のレトリックのクラスで、ソフォクレスとエウリピデスの読書に毎日30分充てている。古典の戯曲は、読む分には、許容されたということが理解できる。

この論文では、題名にあるとおり、1671年に刊行された『キリスト教詩、および種々の詩選集 *Recueil de poésies chrestiennes et diverses*¹¹⁾』に焦点を当て、ポール＝ロワイヤルの教育と演劇、そしてラシーヌとの関係について考えたい。1660年の「小さな学校」の解散後、教師のランスロは1669年からコンティ公爵家の若い当主ルイ・アルマン・ド・コンティとその弟の教育係になった。この全3巻12折版の十七世紀の詩を集めた詩集は当時11歳のコンティ公に献呈されている。献辞は、ポール＝ロワイヤルと交流があったラ・フォンテーヌによって韻文で書かれている。序文は諸説あったが、1964年のジュル・プロディの論文¹²⁾により、現在はピエール・ニコルが執筆したというのが通説になっている。演劇の観点からとくに注目を引くのが、その第3巻である。文字通り「種々の詩」のなかに、当時の戯曲の抜粋がいくつか載っているからだ。コルネイユの『メデ』と『ルシッド』、『オラース』、『シンナ』、『ポリュークト』、『ポンペー』、『エラクリュス』、『ニコメード』、デマレ・ド・サン＝ソルランの『妄想に囚われた人々』、ラシーヌの『アレクサンドル大王』と『アンドロマック』の抜粋が載っている。

言うまでもなく、この時代の演劇論争のことを考えると、大きな疑問が生じる。ルイ・アルマンの父親のアルマン・ド・コンティ公爵は、モリエールを庇護したのちに回心し、演劇の敵にまわった人物として有名である。亡くなった1666年に『演劇と見せ物に関する論考』*Traité de la comédie et des spectacles*¹³⁾が刊行されており、演劇が人々の心に刻む強烈な印象、とくに情念をかきたてる力を批判している。また、ニコルも1667年の『演劇論』のなかでコルネイユ劇を激しく批判し、『テオドール』を例に取って、宗教的な題材の芝居にも否定的な見解を示している。デマレやラシーヌとの論争からまだ5~6年しか経っていないのに、劇詩の抜粋の選択にポール＝ロワイヤルの教師たちはどこまでかかわっていたのか、同意したのであれば、どのような視点からこれらの抜粋を許

容したのか、大いに興味をそそる。

この『詩選集』はラシーヌの伝記には、ポール＝ロワイヤルとの和解の時期をめぐって登場するが⁽¹⁴⁾、ともすると見過ごされがちである⁽¹⁵⁾。まだ謎の多い作品と言われているが、その編集課程に関する論文もあり、近年はポール＝ロワイヤルと詩についての著書でも取り上げられている⁽¹⁶⁾。しかし、教育の観点から、あるいは演劇の観点から、この『詩選集』の内容に踏み込んだ研究は見当たらない。そこで、もう一度、ポール＝ロワイヤルの教育および演劇に対する姿勢と照らし合わせて、この『詩選集』の編成課程を振り返り、どのような劇詩の抜粋が掲載されているのか、検討することにしたい。

ポール＝ロワイヤルの教育における言語と詩

まず、『詩選集』の検討に入る前に、ポール＝ロワイヤルの教育におけるフランス語、そして詩の位置について、簡単に説明したい。

ポール＝ロワイヤルの教育はいろいろな意味で画期的だったが、当時とくに大ヒットしたのが語学教育教材だった。ラテン語の韻文で書かれたデポテールの文法書を使ってラテン語を教えた他校と異なって、ランスロたちは、フランス語の韻文で書かれたラテン語の文法書『ラテン語を簡単に短時間で学ぶための新しいメソッド』(1644)を作成している。再販に再販を重ね、ランスロはほかに1655年にギリシャ語、1659年にイタリア語、1660年にスペイン語のメソッドを次々に出版する。ラシーヌの1660年以降の書簡に散りばめられた引用にはラテン語以外にイタリア語の引用も多い。ギリシャ語だけでなく、イタリア語もランスロになったものと思われる。

これらのメソッドの後尾に、その言語の詩を理解するための解説がついていた。そして、1650年にラテン語の教科書の第2版が出るが、その巻末に、「フランス詩の規則に関する簡略な説明」⁽¹⁷⁾と題する文章が付された。その後、「小さな学校」解散後の1663年には、各言語の教科書に載せた詩論がまとめられて、『ラテン語、フランス語、イタリア語、スペイン語の四つの詩論』⁽¹⁸⁾と題する一冊の本として出版される。1650年の教科書と1663年の『四つの詩論』は、フランス詩の部分は一二か所を除いてはほぼ同じなので、本論文では今後、両方をまとめて、「フランス詩論」と呼ぶこととする。

「フランス詩論」の音節や韻の説明は発音の問題ともからんでおり、作品を正しく朗読することを目的にかかっている。今読んでも、十七世紀の詩に関する簡潔で優れた入門書である。ラシーヌは女優のシャンメレ嬢に朗誦を教えたと言われているが、ポール＝ロワイヤル時代にすでにその手ほどきを受けていたことが見て取れる。

教育のもう一つの特徴は、精選された原典主義とでもいうべき読書方針である。ポール＝ロワイヤルの教師たちは原典にこだわった。各国語の詩論も有名な詩人の例を載せている。1659年のラテン語の『風刺詩選集』*Epigrammatum delectus* (1659年)⁽¹⁹⁾は、マルティアリスの詩のほか、古代と十七世紀の多くの詩人の詩やスペイン語の格言を紹介している。もちろん、少年たちにすべてを原

文のまま読ませるのではなく、教師たちが予め精選し、検閲し、場合によっては部分的にカットした文章を提供している。だが、一方で、マルティアリスの風刺詩に590ページ中312ページを割くこと自体、教師たちの許容度の広さを物語っている。詳しくは別の論文に譲るが、削除されているとはいえ、マルティアリスには多くの赤裸々で卑猥な詩がある。選択された詩も、世間を相対化する威力はあり、音声やリズムを駆使して短いなかでみごとにまとめ上げられているが、辛辣な笑いを巻き起こす詩も多い。色事に関係した詩は取り上げられていないことを除いては、かなり自由な選択となっている。

したがって、ポール＝ロワイヤルの教師たちは詩を嗜むこと、過去や同時代の詩についての広い教養を身につけることを目的としていたと言える。ラシーヌが「ソネ」を書いて「破門に破門を宣告された」のは、詩を書いたこと自体よりも、よくあるように恋愛をほのめかす「ソネ」だったことが周囲を逆なでしたのではないだろうか。たしかに、手紙では『セーヌ川のニンフから女王へ』のオードを執筆中に、「ジャンセニスト」の女中に告げ口をされたら大事だとおどけて書いているが⁽²⁰⁾、1671年の『詩選集』を見ると、この種の詩はたくさん掲載されている。第3巻には『セーヌ川のニンフから女王へ』も載っている。

『詩選集』の編纂—ブリエンヌとポール＝ロワイヤルのかけひき

こうした観点から見ると、1671年の『キリスト教詩、および種々の詩選集』はラテン語の『風刺詩集』と同様に、フランス語の詩についても、多くの詩人を紹介しながら、精選された詩集を提供していて、ポール＝ロワイヤルの教育方針に適っていることがわかる。ニコルの序文からも、この詩選集が教育目的に編まれたものであることが確認できる。ただ、ここで研究者を悩ませるのは、だれが編集したものなのか、という問題だ。出版許可は Lucile Helie de Breves の名で出ているが、これはブリエンヌ伯爵アンリ＝ルイ・ド・ロメニーの別名であることが分かっている。ブリエンヌは波乱の人生を辿った人で、1658年に22歳の若さで外務担当の国務卿を務めた人物である。しかし、3年後の1661年には早くも失脚し、その後オラトリオ会の修道士となる。自伝⁽²¹⁾で余暇に詩に傾倒していったと述べている。1665年辺りからランスロヤアルノーと知り合い、1667年にはランスロが南仏のアレの司教に相談に行った際に、その大旅行に同行したほどの仲になっている⁽²²⁾。1669年にランスロの作とされる著書⁽²³⁾がブリエンヌの名で出ているが、ブリエンヌが国王から自由に出版する許可を得ていたことも関係していると思われる。ブリエンヌは1671年の『詩選集』出版直前の1670年の秋にドイツに逃げて、恋愛事件の末、精神病患者とされ、サン・ラザールの監獄に17年間を過ごすことになる。

この『詩選集』にブリエンヌが関係していたことは間違いないが、ラ・フォンテーヌの献辞はポール＝ロワイヤルの隠士たちとの共同作業であったことを示唆している。

この本をこの状態に仕上げた人たちは、

輝かしい言葉で公爵に献辞することもできた。

しかし、世間と喧騒から遠く離れて

彼らが味わう深い平和から出ることを恐れて

私に、彼らの代わりにこの書を世に出すよう促した。⁽²⁴⁾

また、ブリエンヌ自身の手書きのノートが残っており、そのなかで、哲学者アントワーヌ・アルノーの長兄に当たる隠士で、詩人でもあるロベール・アルノー・ダンディイについて、「こうして毎日のようにこの善良で偏屈な老人とやりあわなければならなかったのだ [...]。彼はジャンセニスト的な嫌悪や良心の呵責で、私の詩選集を台無しにしてしまった。ラ・フォンテーヌ氏とラシーヌ氏と私しかいなければ、もっと評価されたものができただろうに。」⁽²⁵⁾と述べている。また、ポール＝ロワイヤル関係者が集うリアンクール公爵邸でのさまざまな発言を記録した『種々の断章録』に⁽²⁶⁾、ポール＝ロワイヤル関係者のゴンベルヴィルとダンディイがブリエンヌの『詩選集』を見直している、との記述がある。サン・ラザールの監獄を出たあとに書かれたブリエンヌの自伝に、1672年にはジャンセニストたちと決別したとあるのも、頷ける。

『詩選集』はしたがって、妥協の産物でもあるが、それにしても、教師たちの文章などと照らし合わせてみると、想像以上にポール＝ロワイヤル色が強いことが分かってくる。全3巻のうち第1巻「キリスト教詩」をみると、先ほどの語学教材に付随した「フランス詩論」の例文の多くが、取り上げられていることに気付く。「フランス詩論」の例文の大部分が、アントワーヌ・ゴドーという詩人司教と、有名なマレルブの詩の抜粋だが、『詩選集』の第1巻はそれらの詩の全文を多く収録している。ゴドーは1650年にはグラースの司教で、1671年当時はヴァンスの司教だったので、作者名が変わるが、同一人物である。この『詩選集』の生成過程を研究したジャン・ルソーニエは、ポール＝ロワイヤルの他の教材との関係に触れておらず、マレルブやゴドーの詩はブリエンヌが選定したものと考えている⁽²⁷⁾。だが、ブリエンヌはラテン語教材に初めて「フランス詩論」が載った1650年にはまだ14歳だった。「フランス詩論」と『詩選集』の間に明らかな連続性があり、ランスロやニコルおよびダンディイとゴンベルヴィルの意向が反映されていることがうかがえる。

第2巻の「種々の詩」は、アンリ四世からルイ十四世までの国王やリシュリユー、マザランやその他の貴族に捧げられた詩が多く含まれている。ポール＝ロワイヤルは反体制的な印象をもたれるが、元来フランス国王の司教任命権などを認めるガリカン派である。ニコルは「偉人について」De la grandeur という文章で、権力は神によって国王に授けられるだけでなく、その大臣や統治に携る人たちにも伝授されると説明している⁽²⁸⁾。加えて、ランスロの強力な支えとなっている若いコンテイ公の母親は、マザランの姪に当たる。登場する詩人は、マレルブとその弟子のフランソワ・メナールの詩が圧倒的な位置を占めているが、シャブランやバンスラード、ヴォワテュールやペローなど、多様である。この多様性には驚かされるが、『種々の断章集』はリアンクール邸のポール＝ロワイヤル関係者たちの言葉として、じつに多くの詩人や著者への言及を収録しており、例えば、プレシュの詩人として知られるヴォワテュールなどは高く評価されていたことがわかる⁽²⁹⁾。

コルネイユとラシーヌ — 演劇批判と抜粋の選択

そして、コルネイユやデマレ、ラシーヌの戯曲の抜粋が載っている第3巻も同じように多くの詩人の詩を収録している。冒頭はボワローの国王に宛てた書簡詩や風刺詩（V, VIII, II, IV, VII, IX）に始まり、ラ・フォンテーヌの詩、とくに『寓話』16篇で締めくくっている。ボワローの齒に衣着せぬ風刺詩はマルティアリスの毒舌を思い起こさせる。また2大劇作家のほかに神学者のカサーニユもいれば、スグレヤスカロンなど多様な人物が並ぶ。

戯曲の抜粋については、ジョルジュ・フォレストイエはラシーヌの伝記で、1671年に上演された『ベレニス』の章で取り上げている。デマレはすでに30年前から戯曲を書いておらず、テオフィル・ド・ヴィオー、バス、ジルベールヤスカロンの劇作家の詩が収録されているのに、ほかに戯曲の抜粋がないことを指摘し、次のように言っている。「ラシーヌはこうしてただ一人、[コルネイユ]の傍らに並ぶにふさわしいと判断されたようである。[...] ブリエヌとその友人たちがこの詩集を準備する際にラシーヌに与えた特権的位置が見て取れる。⁽³⁰⁾」たしかに、コルネイユ以外にまだ四～五作しかないラシーヌだけを取り上げたことで、現代のわれわれから見れば、演劇界に対等に君臨する二人の悲劇作家という印象に違和感はないが、まだ当時の実感ではなかったはずである。

まずコルネイユの詩から先に見てみよう。冒頭にマザランに捧げられた詩が掲げられている。

オラースやオギュスト、ボンペーを描いたとき、
私の詩の女神は幸運にも誤解していました。
彼らを描いているうちに、知らずに、
枢機卿のお姿の一面を映し出していたのですから。⁽³¹⁾

コルネイユの英雄たちが、コンティ公の大伯父であるマザランになぞらえられたのでは、その英雄たちを紹介せざるをえなかったに違いない。もっとも、それだけではない。ラシーヌとの論争の際に、ニコルを擁護して筆を取ったバルビエ・ドクールは、劇作家について「尊敬に値する仕事ではない」とニコルが言ったことについて、以下のように付け加えている。

しかし、だからといって、ソフォクレスやエウリピデス、テレンティウス、コルネイユの作品のなかの美しいところを認知し、相応に評価していないわけではありません。その道に通じているとさえ言えますし、評価に際して知るべき規則を知っています。⁽³²⁾

ここで、2～3の例しか取り上げられないが、一番長く、複数の場面にわたって引用されているのが逆説的に『オラース』である。なぜ逆説的かというと、ニコルが『演劇論』で批判していた、コルネイユが好む「ローマ的な美德」、言いかえれば誇り高い勇気とでも言うべき美德の代表的な作

品だからである。

劇詩人のなかで、おそらくもっとも良識のあるコルネイユの戯曲は、すべて傲慢や野心、嫉妬、復讐心、そして、主に恐るべき自己愛にほかならないあのローマ的な美徳の鮮烈な表象でしかない。⁽³³⁾

『オラース』の引用で目を引くのは、それぞれの国を代表して戦うことを迫られている義理の兄弟オラースとキュリアスの対話だ。あくまで戦いを主張するローマの代表オラースと、肉親との戦いに苦悩する人間味あふれるキュリアスのみごとに対照的なやりとりである。オラースが逃げたという誤報に父親が激怒する場面と並んで、このローマ的美徳について考える材料を提供している。ニコルは古代の作品について、間違った文章でも、その間違いをうまく指摘すれば、有用な教材になると説いている⁽³⁴⁾。『オラース』の抜粋はキュリアスの死で終わり、「ローマ的な美徳」について批判的に考える好材料といえる。

『ル・シッド』についても、ニコルは復讐心を批判していたが⁽³⁵⁾、引用はシメーヌが国王の前で、ロドリグに決闘で殺された父親の敵を訴えにくる場面である。復讐の問題を真っ向から論じられる場面が選ばれている。これ以外の場面はなく、恋愛の場面も、ロドリグも出てこない。プリエンヌの不満が理解できる。

コルネイユのほかの戯曲の扱いについて簡単に紹介すると、『オラース』に次いで、一番多くの抜粋が採用されているのは、『シンナ』と『ポリュクト』である。両方とも、倫理的に肯定できる題材だったことは明らかである。『シンナ』では「三頭政治の描写、シンナは陰謀の話をする」、「オギュストは皇帝の座を返上したい」、「オギュストとシンナの対話、セネカから」とあるが、野心を排した皇帝の言葉や寛大な裁きという倫理的な考察に適した抜粋のほか、歴史に触れる場面も取り上げられている。また、『ポリュクト』は、「ポリュヌの夢」、「ポリュクトとネアルクの対話」、「ポリュクトと妻の対話」、「最初のキリスト教徒の美しい描写」とあり、引用も長い。いずれもキリスト教の模範を示す肯定的な抜粋である。あとは非常に短い抜粋が続く。ほかの戯曲は、「金羊皮」とあるのが、『メデ』のうち金羊皮伝説を語っている台詞2か所を合成した抜粋で、神話を紹介する意図がみえる。残り4作は数行、ときに3行の引用である。『ボンペー』の「セザールの前に提出されたボンペーの首」、『エラクリュス』の「専制君主の悲惨」と「息子を確認できないフォカスの嘆き」、『ニコメード』は「大きすぎる恩は非難に等しい」（プリュジラス王が王位の支えとなっている息子のニコメードについて、疎ましさ表現する場面）である。これらの作品の引用の短さは、紙幅のためだろうか、批判も込められているのだろうか。抜粋は倫理的な考察に適したものと歴史や神話を紹介するものが採用されている。

ラシーヌについては、『セーヌ川のニンフから女王へ』の次に、1665年の『アレクサンドル大王』から、2箇所の抜粋がある。いずれもポール＝ロワイヤルの課題図書「クイントゥス・クルティウスによる」と明記されている。抜粋はまず二幕の二場で、アレクサンドルの使者エフェステイオン

がインドの国王タクシルとポリュスにアレクサンドルの寛大な扱いを受け入れるか、すべてを失うかの二者択一を迫る場面だ。この場面では、アレクサンドル伝の長大な遠征が、タクシルとポリュスの口から批判的に語られる。もうひとつの抜粋も、アレクサンドルの恋人が、兵士が戦争に疲弊し、不毛に感じていることをアレクサンドル自身に説く台詞である。この『詩選集』第3巻の冒頭で、ボワローがアレクサンドルについて「アジアを灰に帰したあの無分別な男」と人間のおろかな野望の象徴にしたてている「風刺詩V」に通じる。ラシーヌの戯曲は敗者を寛大に扱う大王という結末が、フロンドの乱終結後のルイ十四世へのオマージュと受け取られたが、『詩選集』の編者たちは、この側面も、もちろん恋愛の場面も取り上げない³⁶⁾。続く『アンドロマック』の抜粋も、やはり戦争の傷跡を描写したもので、「トロイヤ炎上の語り」とある。ピリュスがトロイヤ陥落の残虐と狂乱状態を描く台詞である。そのあとの「アンドロマックの美德と息子への愛」と題する抜粋も、今度はアンドロマックが侍女のセフィーズにトロイヤの陥落を描き、亡き夫エクトルに息子を託されたことを語る場面である。このあと、「死ぬ覚悟のアンドロマックがセフィーズに息子を託す」と「ピリュスを殺したオレストの後悔」という題が続く。ラシーヌの抜粋は、底知れぬ野望と戦争の悲惨にかたよっており、そのかぎりでは、コルネイユと異なって、教師の批判的解説を必要としない。また、なによりも、非常に美しい詩句である。

ピリュスやエルミオーヌの愛の錯乱は出てくることはないが、『アンドロマック』の中心的なテーマの源泉とされるローマの詩人カトゥルスの「私は憎み、そして愛する」*« Odi et amo »* という愛のパラドックスで始まるエピグラムは、『風刺詩選集』に「恋人の錯乱」という題を付されて収められている³⁷⁾。その意味で、『アンドロマック』はポール＝ロワイヤル好みの要素が多かったはずであるが、『詩選集』の編者たちは、教育的配慮か、同じ愛でも、母性愛の場面しか取り上げていない。

この『詩選集』が出版された1671年初めの時点で、ラシーヌの作品はほかに4作品上演されていた。そのうち、『ペレニス』は1670年の11月に上演されて、間に合わないにせよ、ほかの3作品の出版——『ラ・テバイッド』(1664年)、『裁判きちがい』(1669年)、『ブリタニキユス』(1670年1～2月ごろ)——は充分間に合うタイミングであった。しかし、これらを取り上げられなかったことは、頷ける。第1作目の『ラ・テバイッド』(初演1664年)は、ラシーヌが書簡で「野心」について書いていると言っており、テーマ自体は恩師たちが気に入るはずのものだったが、オイディプス王のふたりの息子が王位を争う有様は、対照法を多用した詭弁と憎しみのぶつけ合いになっていて、引用に値するほどの詩句がない。皇帝ネロが残虐な怪物へと変貌していくありさまを描いた『ブリタニキユス』は、恋愛がからむ場面を除くと、悪の術策の場面しか残らないという点で引用にふさわしくないと判断されたと推測できる。もっとも、上記のコルネイユの『ニコメード』のように、悪の心理を取り上げる可能性がないわけではなかった。まだ傑作としての地位が確定していなかったことも影響したのだろうか。また、『裁判狂い』はアリストパネスに題材を取った戯曲で、破天荒な喜劇であるうえ、ラシーヌのポール＝ロワイヤルの恩師で、有名な弁護士だったアントワーヌ・ル・メートルの演説のパロディーで終わっている。ル・メートルの文体はランスロヤニコルの推奨する文体とはかけ離れているとはいえ、載せられないのは当然である。

また、喜劇について付け加えると、『詩選集』は喜劇の世界をほぼ無視している。笑いをさそう詩は随所に載せており、またポール＝ロワイヤルのテレンティウスやマルティアリスを積極的に取り入れる態度からは、一見、喜劇を排除する理由は見当たらない。だが、載せるとすれば、最大の喜劇作家モリエール以外にありえないが、『詩選集』が献辞されているルイ・アルマン・ド・コンティ公の父親アルマン・ド・コンティは、上記でも触れたとおり、モリエールを一時庇護したのちに回心し、『タルチュフ』の上演禁止を勝ち取った聖体秘跡協会と関係が深かった。それでも、この『詩選集』の第3巻の冒頭をかざるボワローの作品のなかに、モリエールへのオマージュとなっている「風刺詩Ⅱ」が載っている。ただし、「稀有で豊かな知性」と称えた最初の4行が削除されていて、モリエールの韻をみつける才能のみが残されている。

喜劇の引用は結局、デマレ・ド・サン＝ソルランの『妄想に囚われた人々』の引用しかない。3幕の5場の豪華絢爛たる城館の長々とした描写で、登場人物の明らかな虚構として出てくる台詞である。だが、実際はラ・フォンテーヌも描いている宰相リシュリユーの宮殿の描写となっているという⁽³⁸⁾。リシュリユー称賛の詩やリシュリユーも執筆に参加したという戯曲『エウロペ』の序文と並んで掲載されている。『詩選集』に多い、国王や宰相に宛てた詩と同じ次元の引用である。

また、演劇の抜粋からは、恋愛にかかわる場面が、戯曲の重要な要素であっても、すべて排除されていることは上記で述べたとおりだが、これは演劇に特化したことではない。フランス国立図書館の電子版の『詩選集』には、手書きで当初は恋愛詩 *poèmes galants* が載っている第4巻が企画されたが、日の目を見なかったことが記されており、他の書誌情報でも第4巻について言及されているものもある。そして、第1巻冒頭の「忠告」 *avertissement* のなかで、ロベール・ダンディイが、コルビネリ氏による別の詩集で、自分の詩として恋愛詩が載っているが、自分はそのようなものを一切書いていない、と強く抗議をしているむねの断りがある。ロメニー・ド・ブリエンヌの第4巻の計画が中止になった理由がよくわかる。この点からも、この『詩選集』におけるポール＝ロワイヤルの影響が推し量れる。また、アルマン・ド・コンティ公の『演劇と見せ物に関する論考』では、演劇がいろいろなかたちで恋心を描き、掻き立てることが力説されている。若い心にガラントリーを教えることは神の道から遠ざけることになるという訳だ。

おわりに

これらの抜粋からなにが見えてくるのか、もう一度振り返って考えてみよう。この『詩選集』で演劇が取り上げられているのは、ブリエンヌの功績もあるのかもしれないが、抜粋の選定にはポール＝ロワイヤルの意向も反映されていることは明らかである。ニコルは『演劇論』では演劇を攻撃しているが、ポール＝ロワイヤルはもともとギリシャ悲劇の作家の講読をカリキュラムに組み込んでいた。「貴族の教育」のなかで、ニコルは世間で生きていく貴族の子弟には、いろいろな作品について広い知識をもってもらうことが望ましいとしている。ニコルが、フランスの劇詩人のなかで一番良心があるとし、その価値を認めるコルネイユの抜粋が載るのは、それほど不思議ではない。た

だし、上記で見てきたように、危険とされた恋愛の場面は取り上げず、ニコルが攻撃するコルネイユ的な野心や英雄的人間観を批判する意図もみえる。生徒が教師に導かれて、ニコルなどの演劇観と倫理観に沿って読めるよう、徹底的に検証されている。

もちろん、教師たちは、こうした演劇の抜粋を読ませても、生徒に舞台を見せることを受け入れたわけではない。その証拠に、1672年にコンティ公の母親が亡くなり、国王にコンティ公を芝居に連れて行くよう命じられると、ランスロは受け入れられず、教育係を辞退し、去っていく。

もうひとつ残る疑問は、なぜコルネイユと並んで、ラシーヌの作品が取り上げられたのかということである。『詩選集』刊行のわずか5年前に、ニコルに対して激しい論争を挑んできたのは、もう許されたということなのだろうか。フォレストイエ氏は、当時ラシーヌは女優との浮名がまだ立つなどした時期で、この『詩選集』に協力したからと言って、完全にポール＝ロワイヤルの懐に戻ったわけではない、としながら、「愛想のよいダンディイと善良なニコル」が懐柔された可能性は認めている⁽³⁹⁾。ある意味で、この『詩選集』はラシーヌにとって、内輪の仕事だったと言える。ニコルやランスロとの関係は上記で述べたとおりだが、ラシーヌの書簡集に出ている最初の手紙は、1659年にロベール・アルノー・ダンディイに宛てたもので、こっそり敵地に潜入して、イエズス会の説教を聞きに行った顛末を面白おかしく報告する内容である⁽⁴⁰⁾。ちょうど50年という年齢の差⁽⁴¹⁾、それに国の要職を歴任したダンディイの経歴を考えると、そのような手紙を出せるというのは、相当可愛がられたということだろう。また従兄のラ・フォンテーヌとは1660年辺りから遊び仲間でもある。

こうした関係に加えて、なによりラシーヌは『アレクサンドル大王』と『アンドロマック』で劇作家として、すでに高い評価を得ていたこと、その成功が教師たちの教材のクイントゥス・クルティウスやヴェルギリウス、ホメロスにならって、戦争の壮絶さと哀感を描いたものであることが、この『詩選集』の抜粋の選択を決定づけたことが見て取れる。ポール＝ロワイヤルで育ったラシーヌの詩句を新たな教材にしていることは、教師たちがそこに、倫理的にも、文体的にも、自分たちの教育のひとつの結実を見出したからに違いない。

そして、この『詩選集』は、その後の国語教育の教材のいわば元祖とも言えるものである。ニコルが序文で言っているように、フランス詩のよいお手本を示すのが一義的な目的で、演劇についていえば、選定された戯曲や場面の多くは現代でも有名な詩句である。ニコルが序文で若者に浸透させたいとしている「感性」*sentiment*と「センス」*goût*は、現代にまで影響しているとも言える。ニコルは序文で、「詩の規則」を付すことも考えたが、そのようなものはすでに書かれており、それだけではあまり役に立たない、と述べている。多くのよい例文に触れることこそが一番役に立つと言っている。演劇でも「規則」が相対化される時代だが、文体はこのころから「感性」と「センス」、あるいは「なにか名状しがたいもの」*le je-ne-sais-quoi*がキーワードとなっていく。この新しい文体の代表として、用例で頻繁に取り上げられるようになるのがラシーヌの詩句である。ポール＝ロワイヤルは古典主義の文体の形成に大きく貢献したとされるが、ラシーヌもその一端を担うことになるのである。

ニコルは現在の残っている序文で、「したがって詩が排除できないものであるなら、できるだけ不快でなく、できるだけ害がないようにさせるための努力をするべきである。」それには、世間に「有用で罪のない題材について、いい詩を作ることが不可能ではない」ことを示すのが最善の方法であるとしている。この『詩選集』の用例は、規則を述べたてるよりも、最善の「詩論」であるとも言っている。つまり、詩を書くことは、許されることなのである。問題はそれにブリエヌのように多大な時間をかけること、あるいはラシーヌのように職業とすることが容認されるのか、ということであるが、この問題について、ニコルの最終的な序文の下書きとされる原稿が、ニコルの葛藤を物語っている⁽⁴²⁾。終わりのほうで、一篇のオードやソネを書くだけなら、「知性ある人間の余暇」と受け止められるが、「戯曲や叙事詩を書く」のはもはや余暇ではなく、職業とすること、名声や財産を得ることを目的とするものだとしている。「オネットム」にはふさわしくないということになる。しかし、こうも付け加えている。「たしかに、この道でどちらも〔名声も財産も〕手に入れる人たちがいるが、非常に少人数であり、並外れた天分がなければできないことである。」古今の詩の世界に精通しているニコルのラシーヌに対する賛辞と受け止められる。だが、次にキリスト教の観点からの審判が下される。

そして、そのために真に賢明なひと、あるいは頑固に傲慢で、中程度以上の出世に野心を持つにいたるひとたちは、詩人としての名声を求めるところか、むしろ避ける。というのは、他人の気晴らしに人生を費やし、頭をこうした詩の想念で満たすのは、キリスト教的敬虔の念に反することだからである。⁽⁴³⁾

最終的にこの部分はすべて削除されるが、ラシーヌだけでなく、ブリエヌなど引用された多くの詩人に対する批判となっており、問題となったのだろう。

だが、この『詩選集』発刊の6年後、1677年の『フェードル』を境にラシーヌは、詩作を職業とすることに対するニコルの批判を受け入れられる立場になる。国王の修史官の任務につき、演劇界から身を引く。晩年のラシーヌは、一方で国王に仕えながら、もう一方でニコルと親交を深め、修道院の叔母などを表面下で支え、秘かに『ポール＝ロワイヤル略史』を書いていくことになる。

注

本論文は、2011年11月に開催された早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム主催の国際シンポジウム「16～18世紀演劇の諸問題」第3日「信仰・教育と演劇」の発表に修正加筆したものである。

- (1) Frédéric Delforges, *Les petites écoles de Port-Royal 1637-1668*, Paris, les eds. du Cerf, 1985.
- (2) 1646年説は Georges Forestier, *Jean Racine*, Biographies Gallimard, 2006, p.53. 詳細な検討が次の論文にある：小倉博孝「ポール＝ロワイヤルの寵児—ラシーヌはいつ修道院に来たのか」、

- 『流域』64号、2008／2009。
- (3) Jean Mesnard, « Racine, Nicole et Lancelot », in *Jean Racine (1699-1999)*, sous la dir. de Gilles Declercq et Michèle Rosellini, Actes du colloque du tricentenaire (25-30 mai 1999), P.U.F., 2001, p.325.
 - (4) この戯曲もマザランに宛てた詩も紛失している。
 - (5) Jean Racine, *Œuvres complètes*, éd. Raymond Picard, Pléiade, Gallimard, 1966, Tome II, Correspondance, p.382.
 - (6) Ibid., p.384.
 - (7) Pierre Nicole, *Traité de la Comédie et autres pièces d'un procès du théâtre*, éd. critique par L. Thirouin, Champion, 1998. p. 219 : « Un faiseur de romans et un poète de théâtre est un empoisonneur public, non des corps mais des âmes des fidèles ».
 - (8) Nicolas Fontaine, *Mémoires ou histoire des solitaires de Port-Royal*, éd. critique Pascale Thouvenin, Champion, 2001 ; Irénée Carré, *Les pédagogues de Port-Royal*, Slatkine Reprints, 1971, ほか。
 - (9) Antoine Arnauld, « Mémoire sur le Règlement des Etudes dans les Lettres humaines », in *Les Pédagogues de Port-Royal*, p.217. 書かれた時期は「小さな学校」解散前とも後とも言われ、不明。
 - (10) Louis Racine, *Mémoires contenant quelques particularités sur la vie et les ouvrages de Jean Racine*, in Jean Racine, *Œuvres complètes*, éd. Georges Forestier, Gallimard, Pléiade, 1999, p.1120. 息子ルイ・ラシーヌの証言のなかでも、信憑性がある情報とされる。
 - (11) *Recueil de poésies chrestiennes et diverses*, dédié à Mgr le prince de Conty, par M. de La Fontaine, Paris : P. Le Petit, 1671, 3 vol. in-12.
 - (12) Jules Brody, « Pierre Nicole, auteur de la préface du *Recueil de poésies chrestiennes et diverses* », in *XVIIe siècle*, 1964, No64, p.31-54.
 - (13) Armand de Conti, *Traité de la Comédie et des Spectacles* [1666], in Pierre Nicole, *Traité de la Comédie*, 前掲版。
 - (14) Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, 1961, p.214, ほか。
 - (15) 例えば、ジャン・メナールは前掲論文でラシーヌとランスロヤニコルの関係に関する資料を詳細に検討しながら、『詩選集』には言及していない。
 - (16) Jean Lesaulnier, « Port-Royal et la poésie, genèse du *Recueil de poésies chrétiennes et diverses* », *LIAS* 18 (1991)1 ; Tony Gheeraert, *Le chant de la grâce, Port-Royal et la poésie d'Arnauld d'Andilly à Racine*, Champion, 2003.
 - (17) Claude Lancelot, « Breve instruction sur les regles de la poésie françoise », in *Nouvelle methode pour apprendre facilement & en peu de temps la langue latine*, Seconde edition revue & augmentée. Antoine Vitry, 1650.
 - (18) Claude Lancelot, *Quatre traitez de poésie, latine, françoise, italienne et espagnole*, P. Le Petit, 1663.

- (19) *Epigrammatum delectus ex omnibus tum veteribus tum recentioribus poetis*, attribué à Claude Lancelot, introduction de Pierre Nicole : dissertation de vera pulchritudine, C. Savreux, 1659.
- (20) Jean Racine, *Œuvres complètes*, éd. Raymond Picard, Pléiade, Gallimard, 1966, Tome II, Correspondance, p.382.
- (21) *Mémoires de Louis-Henri de Loménie, comte de Brienne*, publiés d'après les manuscrits autographes par F. Barrière, Paris, Ponthieu et Cie, TomeII, p.229.
- (22) Jean Lesaulnier, 前掲論文, p. 86.
- (23) Claude Lancelot, *Nouvelle disposition de l'Écriture Sainte mise dans un ordre perpétuel pour la lire toute entière chaque année*, C. Savreux, 1669
- (24) *Recueil de poésies chrétiennes et diverses*, Tome I, dédicace :
« Ceux qui par leur travail l'ont mis en cet estat,
Te le pouvoient offrir en termes plein d'éclat :
Mais craignant de sortir de cette paix profonde
Qu'ils goûtent en secret loin du bruit & du monde
Ils m'engagent pour eux à le produire au jour. »
- (25) Jean Lesaulnier, 前掲論文 p.98: « Voilà comme, tous les jours, il fallait être aux prises avec ce bon, mais chagrin vieillard [...] Aussi a-t-il tellement défiguré mon recueil par ses dégoûts et scrupules jansénistes, qu'il n'a pas eu l'approbation qu'il aurait reçue, s'il n'y avait eu que M. de la Fontaine, M. Racine et moi qui nous en fussions mêlés.»
- (26) Jean Lesaulnier, *Port-Royal insolite, Edition critique du Recueil de choses diverses*, Klincksieck, 1992, p.364.
- (27) Jean Lesaulnier, «Port-Royal et la poésie, genèse du *Recueil de poésies chrétiennes et diverses* », p. 94.
- (28) Pierre Nicole, *Essais de morale*, choix d'essais, introd. Laurent Thirouin, P.U.F., 1999, p.205.
- (29) *Recueil de choses diverses*, pp.363, 378.
- (30) Georges Forestier, *Jean Racine*, 2006, p.405 : « Racine paraît ainsi avoir été le seul digne de figurer aux côtés de [Corneille]. [...] On voit le statut exceptionnel que Brienne et ses amis, en préparant ce recueil, lui avaient conféré. »
- (31) *Recueil de poésies chrestiennes et diverses*, Tome III, p.88
« Quand j'ay peint un Horace, un Auguste, un Pompée :
Assez heureusement ma muse s'est trompée ;
Puisque sans le sçavoir, avecque leur portrait,
Elle tiroit du tien un admirable trait. »
- (32) Pierre Nicole, *Traité de la Comédie et autres pièces d'un procès du théâtre*, p.255 : « Mais enfin il n'empêche pas qu'on ne connaisse ce qu'il y a de beau dans les ouvrages de Sophocle, d'Euripide, de Térence et de Corneille, et qu'on ne l'estime son prix : on peut même dire qu'il s'y connaît, et qu'il sait

les règles par où il faut en juger. »

- (33) Ibid., p.62 : « Toutes les pièces de M. de Corneille, qui est sans doute le plus honnête de tous les Poètes de théâtre, ne sont que de vives représentations des passions d'orgueil, d'ambition, de jalousie, de vengeance, et principalement de cette vertu Romaine, qui n'est autre chose qu'un furieux amour de soi-même. »
- (34) *Traité de l'éducation d'un Prince*, in *Essais de morale*, p.307.
- (35) *Traité de la Comédie*, p.70.
- (36) アレクサンドル大王の二面性については、拙論文 « Alexandre le Grand — les deux visages d'un mythe », Institute for Theater Research II offprint, The 21st Century COE program, Waseda University, January 2004, p.43 et sq. を参照。
- (37) *Epigrammatum delectus*, p.323.
- (38) この点については伊藤洋先生にご指摘いただいた。ここでお礼を申し上げたい。
- (39) G. Forestier, *Jean Racine*, p.348.
- (40) Jean Racine, *Œuvres complètes*, éd. Raymond Picard, Tome II, Correspondance, p.377.
- (41) ダンディイは1589年生まれ、ラシーヌは1639年生まれ。
- (42) この問題については、フォレストイエもラシーヌの伝記 (p. 15-16) で注目しているが、ニコルの序文とその草稿は以下のニコルの論文集に掲載されている。Pierre Nicole, *La vraie beauté et son fantôme et autres textes d'esthétique*, éd. critique et trad. de Béatrice Guion, Honoré Champion, 1996, p.141 et sq. et p.169 et sq.
- (43) Ibid.p. 176 : « Et c'est pourquoi les personnes vraiment sages ou fixement orgueilleuses et qui portent leur ambition plus loin qu'à une fortune médiocre évitent plus qu'ils ne recherchent la réputation des poètes, parce qu'[...] il est contre la piété chrétienne de passer sa vie à divertir les autres et d'avoir toujours l'esprit rempli de ces idées poétiques ».